

THE NEW FARMERS

ニューファーマーズ

◆郷土を興す農業者 ◆日本を伸ばす農業者 ◆世界を拓く農業者

contents

就任のご挨拶	1
研修生からの便り	2・3
令和8年度アグトレ募集開始	4
受入事業	5
研修生と受入農家からの便り	6
現地担当からの便り	7
協会の動き	8

ニューファーマーズ 249号から、オンラインでもご覧いただけます。
本会ホームページで掲載するほか、Emailでも配信しています。

就任のご挨拶

公益社団法人 国際農業者交流協会
副会長 村上 秀徳



このたび副会長に就任することとなりました村上です。国際農業者交流協会の理事として3期勤めてきましたが、これからは新しい立場で国際農業者交流協会の運営にかかわることになりました。どうぞよろしくお願いいたします。

国際農業者交流協会につきましては、農林水産行政などにかかわってきた経験からなんとなくご縁が深いという気がしております。

若い頃、農林水産省からの出向で、アメリカの大使館で一等書記官を務めましたが、その際、社団法人国際農友会（旧団体）会長であられた内村良英さんがワシントンを訪問されました。ご訪問の目的は研修生のビザ問題についての米国政府との協議であったと記憶しております。大使館に赴任する前に当時の普及教育課長の杉本さんから国際農友会のことや米国でのビザの問題について説明を受けておりました。国務省へは私の上司であった参事官が随行し、私はアポ取りなどのロジ面を担当しました。世銀に勤めていた息子さんの家にご滞在で、朝お出迎えに行った覚えがあります。

国際農友会は、その後、農業研修生米協会と統合されることになりましたが、統合後の国際農業者交流協会の初代会長になられた大河原良雄さんは、まさにその当時私がワシントンの大使館で書記官として仕えた大使でございました。



また、私が農林水産省を退官後、在チリ日本大使として勤務していた当時、チリの農業者研修団体が日本に農業者を派遣したいという希望を持っていたことを受け、蒲田にある国際農業者交流協会を訪問した記憶がございます。残念ながら先方の予算の確保の関係でその構想は実現せず協会にご迷惑をおかけしたと申し訳なく思ったところでした。

その罪滅ぼしというわけではございませんが、以上のような私のこの協会との関わりの経緯に照らしましても、協会からの理事就任の打診があったときにはお断りするわけにはいかないという気がしたところでした。

協会の歴史をたどると満州開拓農民の帰国者による農業者海外派遣の構想に端を発しており、昭和27年にアメリカに初めて日本の農業者を派遣したということを聞いております。また農業研修生米協会の方でもたくさんの研修生が海を渡ったと承知しております。このように長い歴史を持つこの団体の業務は、アメリカやヨーロッパなどへの農業者の派遣のみではなく、現在では東南アジアなどを中心として、外国からの農業者も受け入れる事業、さらには技能実習生制度や特定技能の制度についても、その監理団体・登録支援機関として活動するなどかなり大きく拡大しております。

派遣事業による海外研修の経験者は地域のリーダーとして我が国の戦後の農業の発展に多大な貢献をされ、地域農業における指導的役割を果たしております。当協会の理事就任から協会の理事会などに参加する過程で、この協会がこのようなO Bの皆さんとの熱い熱意と力強い支援に支えられているということを実感します。

このような協会の運営の一責任者として携わるようになりますことは大変光栄であり、かつまたその責任の重さを痛感しております。皆様方のご協力を得ながら微力を尽くしていきたいと思いますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

ニューファーマーズ No.259 |

2026年（令和8年1月）

ホームページ: <https://www.jaec.org>

フェイスブック: <https://www.facebook.com/jaec.trainee>



編集・発行 / 公益社団法人国際農業者交流協会

〒144-0051 東京都大田区西蒲田5-27-14日研アラインビル8階

TEL: 03-5703-0251 (総務部) 03-5703-0252 (派遣業務課)

03-5703-0253 (活動支援課) 03-5703-0254 (受入業務課)

FAX: 03-5703-0255

研修生からの便り

めぐり合い Hawaii

中屋 太助 (岐阜県/R5/アメリカ)
研修農場: Hirako Farms (ハワイ州)

僕はハワイ島ワイマエに位置する葉物野菜を全般に扱う Hirako Farms さんのもとで研修 しています。僕は岐阜県農業大学校在学中にアグトレ OB の方から講義を受け、この研修に 興味を持ちました。自身が外国人研修生としての立場で働くこと、アメリカ独自のライフスタイルを学びたく参加しています。僕の配属された農場はキャベツや白菜、レタス等の高原野菜を栽培しています。1年を通して気候の変化がほとんどなく、広大な土地を輪作し決まった量を毎週収穫しています。葉物野菜は扱いがセンシティブなので、葉を折らないように収穫・梱包するのには苦労しました。また、農場は兄弟で経営をしています。それぞれ作業の内容や考え方も異なり、2人のボスから多くの知識、技術を学ぶことができました。ハワイでの



同僚と4人でマラサダを

研修は僕に多くのものを与えてくれました。1つ目は出会いです。研修初期は語学力が乏しくうまく会話できない、仕事は大変。そんな僕を支えてくれたのはハワイの友人たちでした。彼らとは毎週水曜日に参加している

夕食会で出会いました。現地の人から様々な国の研修生が集まります。つたない英語ながらも自分の言葉で会話をしていくことでだんだんと英語力も付き、互いのことをより理解しあい笑いあえる、本当の友人になりました。夕食を済ませるとピンポンやテーブルサッカー、全員参加のゲームがあり笑いが絶えない空間はとても居心地のよいものでした。友人と会えることが研修の大きなモチベーションとなりました。

14ヶ月という研修期間は長いようであつたという間でした。日本から離れ1人はじめての仕事。苦しいこともありましたがそれ以上に楽しかった、成長できたと自信を持って言えます。研修に興味のある方、参加を迷っている方、自分の可能性を広げるチャンスです。ぜひ参加を検討してみてください。

虹の下で
仕事に勤しむ



未知なる道をただ既知に!

長野 尚史 (鹿児島県/R6/スイス)
研修農場: Fahrmaadhof AG

私は東スイス・ディポルドザウの野菜農家のもとで、農業研修を行っています。研修先の農場では約 30 種類の野菜をおよそ 380ha の規模で、周辺の農家と協力して栽培しています。生産・加工・流通や販売といった6次化農業を行っています。代表的な農作物はアスパラガス・ジャガイモ・いちごです。私は主に生産と加工の仕事を行っており、

農作物の成長や天候の変化を身をもって感じております。

最も勉強になったのは機械の改良と応用を考慮した、栽培品目の選択性です。研修先の農場では繁忙期には 70 人の従業員を抱えるため、作業が簡易的になるのは当然です。加えて農作物の品目に注目すると、同様の収穫機やトラクターを用いることで、無駄なコスト削減や道具の汎用性に気づくことができました。ま



ビーツ収穫の様子

社長の
シモンさん、
世話役の
ブリギッテさんと



た夏の繁忙期が終わった頃に、会社で Grillfest がありました。てっきり食事して楽しむだけかと思っていた。しかし食事を準備している間に、会社の上層部によるトラクターや害虫などの作業に関する説明会が始まりました。他の研修生にも確認したところ、スイスではこういった集まりで普段の作業や機械についての説明会があるそうです。ただ働くだけでなく、「なぜ・どのように」と考えてもらえるようなきっかけ作りは真似したいなと思いました。

休日には他の街の散策・研修先の訪問、収穫祭や伝統的な祭りなどを楽しんでいます。最も印象的だったのはアルプスの放牧が終わり、牛やヤギをお迎えにいくお祭りです。牛がおめかしをして下山してきます。家族のように迎えられる姿を見て、「愛されているなあ」と感じました。

ここに書ききれないほど多くの体験をし、学んでいます。またこの研修では今まで知識だったことが実践を踏まえて自分の力に変わり、不安も今までの経験を糧に乗り越えています。自分の成長に納得し、祖父を継ぎ、いつか地元の鹿児島で自分なりの農業をするために頑張り続けます。

研修生からの便り

すべてが刺激的な日々

阿部 美織（岩手県/R6/アメリカ）
研修農場：Gebbers Cattle（ワシントン州）

私は現在、ワシントン州で肉牛の研修を行っています。この農場では主にアンガス牛を山やフィードロットで飼育しており、大自然の中で多くの牛を管理するため作業のほとんどで馬を使って行います。

仕事は山へ牛を集めに行ったり、仕分けやブランディング、フェンス作り、馬の管理等を行っています。日本と異なる点を挙げるならばほぼ全てといつても過言ではありません。多くの山を所有し全域 40mile の規模、馬や犬での管理、砂漠から山奥まで放牧する所など、日本にはないのびのびとした飼育に素晴らしい景色を感じます。同時に 1 頭の価値観や測定方法などから日本の丁寧さに気づかされることもあります。良さも違いも全てが刺激的で日々驚くことばかりです。特にカウボーイは映画の世界だと思っていましたが、実際に働くとこのような大自然の中ではその存在がいかに重要かを実感しました。私は乗馬経験がないため、後



新米カウガール頑張ってます！

を追うだけで必死ですが、仲間の様なカウガールになれるよう練習中です。中々慣れずに大変ですが馬の背から見る広大な景色はとても美しく、頑張ろうと思えます。

また、メキシカンとは言葉の面で苦労しますが、BBCC での学びを生かしたり、教わった言葉を覚えたり、ジェスチャーを使ったりと様々な方法で意思疎通を図ろうとしました。そうして工夫しながらコミュニケーションを取り続けた結果、誕生日に招かれるほど仲良くなりました。以上より、言葉は正しさに拘るよりも伝えよう・受け取ろうとする力が大切だと感じています。ここに来てから驚くことにあまり翻訳機を使用していません。機械に頼らず苦労して取ったコミュニケーションは良い思い出や財産になると思っています。色々な面で壁は沢山あります。毎日分からず事だけです。それでもできることが増えたり、交流が深またりと成長が感じられて毎日とても楽しいです。

Gebbers farm の研修生の受入れは 40 年以上に渡るそうです。先輩方が残してくれた貴重な機会と経験を私も繋げるように、そして後悔がないように大切に過ごしていきます。



農業は草刈りから始まる！

高平 晃希（兵庫県/R6/アメリカ）
研修農場：Full Belly Farm（カリフォルニア州）

私は現在アメリカ、カリフォルニア州の Full Belly Farm という農場で研修を行っています。

ここでは野菜、ハーブ、果樹、畜産その全てをオーガニックで生産しています。この農場では、六次産業化を行なっているため、生産した農産物の一部は自社で加工販売をしています。

基本的にここでは日々異なる作業を行なっており、例えば移植、除草、収穫、たまに動物の仕事をしています。また、毎週土曜日にはサンフランシスコのほうまで 2 時間半ドライブをして、ファーマーズマーケットのお手伝いをしています。ファーマーズマーケットでは現地に住んでる人たちと一対一で会話しながら生産物を販売するため日々英語の勉強になっています。

毎年 10 月の初めには HOSE DOWN というお祭りを開催しています。約 2000 人のお客様、ボランティアスタッフが参加しています。そこでは、羊の毛刈り



Hose Down での farmers market の様子

やスイカコンテスト等の農場のものを使ったイベント、外部の講師が行うワークショップ、屋台やステージイベント、ファーマーズマーケット等様々なイベント

が朝から夜まで開催しています。日本のインターン生はファーマーズマーケットの運営をしました。私は、国内研修で草刈りをしていたこともあり、お祭りまでずっと草刈りの仕事をしていました。その時はこんな仕事意味がないんじゃないかなとずっと思っていましたが、実際にお祭りが始まり私が担当していたところで写真を撮っているところを見ていると、意味のないと思っていた仕事も大事な役割だったんだと思いました。それに、草刈りの出来をオーナーに褒めてもらい入口の草刈りもさせてもらった時は嬉しかったです。

農場に配属されてから約二か月が経ち目まぐるしく充実した日々が過ぎています。ただ、楽しいことだけではなく文化の違いや言語の違いに悩まされることが多々ありますが、研修が終わってから参加して良かったと思えるよう一日一日大切にまた、仲間と協力しながら過ごしていきます。



アセアン農業研修生と受入農家 からのたより



受入農家: 鈴木裕昭 (新潟県/H17/米2)

私の農場は水稻、枝豆、イチゴを主軸に他にも少量ではあるが多品目の野菜を栽培している。そんな農場に5人目で配属された研修生はインドネシアから来たりフキーさん。彼は配属された時点で既にボキャブラリーも多く理解度も高めだったが、性格的にシャイなため、その日本語力はあまり発揮されていなかった。だが、時折り会話中に思いがけず出る口語調や俗語スラングなどを自然に使っている時があるので驚かされたこともよくあった。私自身が他者でいる時があると驚かされたこともよくあった。私自身が他者でいる時があると驚かされたこともよくあった。私自身が他者でいる時があると驚かされたこともよくあった。方言や語尾の癖などを説明するのが質問してきたこともあった。方言や語尾の癖などを説明するのが質問してきたこともあった。方言や語尾の癖などを説明するのが質問してきたこともあった。方言や語尾の癖などを説明するのが質問してきたこともあった。家で一緒にテレビを見ている時、日本のアニメや俳優の名前も良く知っていてその話題から会話を広げていくパターンが多い。作業の面でも指示の理解が速いので、今では複数のタスクのある作業をワンオペで任せる事もあるが、自分で作業を組み立てて順序や効率を考えて作業にあたっている。農場内にて家族と一緒に生活や作業に従事している。ファームステイであるため食事も家族全員で食卓を囲み、仕事以外では日常の買い物や外出、旅行等にも一緒に行くこともある。農作業に限らず、自分の置かれた環境に速やかに適応し、自分の居場所を整備するスキルが身につけられるように重きを置いて指導にあたっている。研修生受け入れを考えると同時に自分の研修生だった頃を思い出して、自分の当時気付けなかった研修の厳しさや楽しさを良い形で引き継いで行きたいと思っている。

研修生:リフキー ファウザン ノヴァル(リフキー)
(B7/インドネシア)

A photograph showing a person wearing a blue shirt and a black cap operating a small, white agricultural tractor or tiller. The machine is being pulled by a rope and is working on a dirt field. The background shows a line of trees under a clear sky. The image is part of a larger text block with Japanese subtitles.

受入農家：田上智章（埼玉県 / H13/ ハワイ）

来た当初は会話もままならなかったのでこれは苦労するかもと心配しましたが、みるみる日本語が上達して今は仕事の説明も理解して冗談も言えるほどとなりました。ミスもしますが注意されてもシュンとせずリカバーが早いところが強いです。仕事が忙しいほど「楽しいです!」と言うのですが間違えていないそうです(笑)性格を今風に言えば「コミュ力おばけ」。タイ人らしい控えめさがありながら底抜けに明るく、また他の研修生の心配をするやさしさで私達に相談してくれます。

まだ21歳と若く人生経験のほとんどはこれからというまっさらな時期に日本で過ごし、あれもこれもやりたい、あと何か月しかない、もっと知りたいと前しか見ていません。日本に来たおかげでタイに帰ってからの仕事のことや自分の考えを持つことができた、研修生にならなかつたら何も考えないで家族と仕事していただけだったかもと本人が言います。彼女の未来を私達も頼もしく思っています。

研修生: サシナ スリワンナ (プリーム)
(R7/ タイ)

日本で学んだことは、仕事に対する責任感や作業の計画と手順を考える力、そして仕事や周りの人に気を配る大切さです。国に帰ったら自分の好きなことに挑戦して、自分の手で実践してみたいです。何事にも負けずに、考えて、試してみる勇気を持ちたいと思っています。そして、お母さんの仕事を継いで、サトウキビを育てて、サトウキビジュースを売りたいです。タイの北から南まで売りに行けるフードトラックを持ちたいです。

元々行けるノートトックを持ちたいです。
おとうさん、おかあさん、そして周りの皆さん、日本で素晴らしい経験をさせていただき、本当にありがとうございます。この経験は決して忘れられない大切なものです。このおかげで、私は大きく成長することができました。暖かく見守ってくださって、心から感謝しています。これからも、この経験を生かして、一生懸命頑張っていきたいと思います。



本会では現在タイ・フィリピン・インドネシアから農業青年を招へいし、約11ヶ月の日本での農業研修を通じて自国・地域の農業リーダーとなる人材育成事業をおこなっております（農林水産省補助事業/ODA事業）。今回は2025年4月に来日した各国研修生とその受入農家のコメントをご紹介します。

※なお研修生の文章は原文のまま一部を漢字に直し読みやすくしてあります。

受入農家：今野建司（宮城県 / S43/ 米 1）

私は20才の時カリフォルニアの白人のコメ農家で一年間の実習生として過ごし、帰国後40才の時にアジア農業研修生受入れ事業に参加させてもらいました。インドネシア、タイ、マレーシアそしてフィリピンから、今年の研修生で延べ30名になります。それぞれの国から選ばれて来る研修生は、意欲的で向学心があり、農業分野はもちろんの事、日本文化や地域の行事、イベント等にも興味を示し、地域の方々との交流を深めるよう配慮して来ました。

米、野菜、花卉など複合的個人営農の私には研修生と共に成長してこれたと言えます。

そして受入農家の皆さんや、フォローアップ旅行での現地OB、OG、スタッフの皆さんとの交流に心豊かな農業人生を送る事が出来ました。自ら選んだ農業でのオンリーワンの人生、

「我が農業人生に悔いは無し！」



研修生：バイリー・ペッシ・ブグトン（バイリー） (R7 / フィリピン)

目さを学びました。日本の人たちは、いつも時間を守って、一生懸命に働いていて、とても素晴らしいと思いました。研修が終わって、フィリピンに帰ったら日本で学んだことを活かして、自分の農園でアスパラガスを育てたいです。そして、他の人にも教えて、一緒に農業を頑張りたいです。

今野さんへ、いつも優しくしてくれて、本当にありがとうございます。一緒に過ごした時間は、私の宝物です。これからもお元気でいてください。国に帰ってもまた会える日を楽しみにしています！

アセアン農業研修生のほか、
技能実習生（フィリピン）、特定技能外国人（フィリピン・タイ・インドネシア）
受入事業も実施しております。各種受入にご興味がある方はこちらのQRコードより、
詳細をご確認ください。
※費用や受入準備期間、入国可能時期が異なります。



その他ご質問やご相談は【受入業務課 03-5703-0254 / asean0254@jaec.org】
へお問い合わせください。

備えの種をまこう。



農業保険や地域の話題
たくさん載せて
ポストに届くよ



安心のネットワーク
NOSAI

購読のお申し込みは、最寄りの農業共済組合または農業共済組合連合会、全国農業共済協会へ
発行所=公益社団法人 全国農業共済協会 東京都千代田区一番町19番地 TEL 03(3263)6413

令和8年度アグトレ 募集を開始しました！

令和8年度の海外農業研修の募集を、1月より開始いたしました！
今年度の派遣先国は、アメリカ・スイス・デンマーク・ニュージーランドの4カ国です。
ぜひお近くの若者にお声がけください！



プレエントリー期間(オンライン申込)

2026年1月13日(火)～2026年7月26日(日)

募集期間(応募書類送付)

2026年1月13日(火)～2026年8月8日(土)



令和7年度の募集活動では、全国各地で多くのOBOGの皆さんにご協力をいただきました。説明会などでご自身の体験を語ってくださったおかげで、「自分も挑戦してみたい」と思う若者が増え、例年を上回る応募がありました。OBOGの皆さまの温かい支援とご尽力に、心より感謝申し上げます。

令和7年度の研修生たちは、2025年9月に茨城県の日本農業実践学園で事前講習を行いました。海外研修の意義を学び、語学研修や農場実習、グループディスカッションなどを通して互

いに刺激し合い、有意義な時間を過ごしました。

ヨーロッパおよびニュージーランドの研修生は3月に、アメリカの研修生は6月に渡航を予定しています。渡航までの準備期間には、新たな取り組みとして外部講師によるオンライン英語教室を毎週開催しており、語学力の向上に努めています。

こうした学びを通して、研修生一人ひとりが自らの課題を見つめ直し、目標に向かって着実に準備を進めています。

また、令和6年度のアメリカおよびスイス研修生は、現在も現地農場で研修を続けています。

アメリカ組は農場実習の開始から半年が経過し、日々の作業を通して経営感覚や農業技術を磨いています。スイス組はまもなく研修を終え、2026年3月に帰国予定です。



スイス研修生 家政学校から Grüezi !



アメリカ研修生 基礎学習のフィールドトリップ

私たちは、OBOGや関係者の皆さんとともに、若者が世界の農業から学び、未来の日本農業を担う人材へと成長していくよう、引き続き取り組んでまいります。

皆さま一人ひとりのご支援が、次の世代の挑戦を支える大きな力となっています。

今後も海外農業研修事業への温かいご支援とご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

現地担当者からの便り

2024年からアメリカの農業研修の現地研修プログラムコーディネーターであり、JATPのダイレクターとして活躍中のLarry Rimpleさんからコメントを頂きました。

MY STORY JATP

ビッグベンドコミュニティーカレッジ財団
JATP ダイレクター

Larry Rimple



Hello, my name is Larry Rimple, Director of the Japanese Agricultural Training Program at Big Bend Community College. I am a native of Moses Lake, Washington,

and was raised in a family involved with local politics, the steel and farming supply industry, and a strong connection to the people of our rural agricultural community. I am a graduate of BBCC and Washington State University, and my life journey took me from the farmlands of Moses Lake to Seattle, and then to Yokohama, Japan where I have lived for 15 years. My wife is from Saga, Japan, and we have two wonderful sons who are both students at the University of Washington in Seattle.

My connection with JATP started in 1986 as a BBCC student when I was writing articles about the JATP program for the BBCC newspaper. Decades later in 2023 I joined JATP as an English Instructor, and in 2024 I accepted the role of director. I am honored to be in this position, and enjoy the communication with our past, current and future JATP trainees. The trainees bring their own unique life story and personality, and we are fortunate to have an average of 30 participants each year who are placed on 16 farms in six states in the USA.

Each September I meet with the trainees in person at Tomobe, Ibaraki, where I describe the program expectations of their 18 months in the USA. I also ask about their goals, their dreams, and why each of them chose to join JATP. This helps with making the best farm placement, and to better prepare our host farms by their knowing who will be assigned to them.

The constant communication between host farms and myself is critical to our programs success. The

hosts accept our trainees not only to their farms, but into their personal lives as well. It is common for our JATP trainees to become considered like family to our hosts. Our farmers share the American farming culture which to our small, rural communities is a cherished experience.

Finding new host farms is our biggest challenge. We have always succeeded with the smaller, family-owned Community Supported Agriculture (CSA) farms that can give more personalized training and also offer our trainees the opportunity to work individually with people in the community who buy produce directly from the farmers. Lower profit margins are a daily struggle for CSA farms, yet another concern is conglomerate farming where large nationwide companies are buying farmland across the United States. This growing corporatization of agriculture and the financial sustainability of farming in today's unpredictable domestic and world market makes it challenging to find hosts able to take on a training position. The good news is that the farms we currently have are passionate about JATP, and their year after year commitment to this program is why since 1966, JATP has continued to prosper!

I am proud to be the director of JATP. I work with amazing farmers across the United States who enjoy sharing their knowledge and wisdom with our JATP trainees. I get to see the best young agricultural trainees from Japan and watch them develop new skills as farmers and as people. For all of us, this is the reason JATP has been successful, and why we are here, from its beginning and to the future.



事業関係者の逝去

伊藤一男さん（東京都/S32/米3）が2025年8月3日にご逝去されました。享年92歳でした。社団法人農業研修生派米協会や本会の運営に関して常々ご支援、ご協力をいただきました。ご冥福をお祈り申し上げます。

／海外研修生の皆さん、私たちと一緒に働いてみませんか／



植物の国際ブランド“PW”をはじめ
グローバルなビジネス展開をする種苗会社です。
海外研修生OBが最前線で活躍しています。

Hakusan 株式会社ハクサン

〒470-0104 愛知県日進市岩藤町三番割321-1 TEL.0561-75-5777(代)

採用情報は
こちら▶



協会の動き

賛助会員・寄付のお願い

国際農業者交流協会の活動をご支援ください！

本会は、次代の農業を担う人材を育て、世界の農業と日本をつなぐ活動を続けています。皆さまからのご支援が、若い世代の挑戦や、農業をめぐる国際交流の未来を支えています。

●賛助会員

本会の活動にご賛同いただき、年会費によって本会を支えて頂いております。希望される方は、協会までお気軽にご連絡ください。

●寄付金

寄付金は全て協会の公益目的事業の運営に活用されます。協会への寄付金には確定申告により寄付金控除が適用され、また相続した遺産を相続税の申告期限までにご寄付いただいた場合、その寄付額に相続税は課税されず、さらに特定の条件を満たせば所得税にも適用されます。領収証は翌年2月中旬までにお届けし、確定申告により税額控除を受けることができます。ご寄付にあたっては以下のゆうちょ銀行（同封の赤色の払込取扱票）又は、銀行振込（振込手数料はご負担ください）をご利用ください。

払込取扱票	銀行振込先口座
ゆうちょ銀行 加入者名：公益社団法人国際農業者交流協会 口座番号：00110-8-538246 ◆領収証送付のため、通信欄にご芳名、ご住所、電話番号をご記入ください。	みずほ銀行 蒲田支店 普通：3106914 口座名：公益社団法人 国際農業者交流協会 シヤ)コクサイノウギョウシャコウリュウキヨウカイ ◆領収証送付のためにご芳名等がわかるようにお振込みください。

賛助会員及び寄付者には、税額控除団体の証明書と共に領収証を翌年2月中旬までに送付しますので、確定申告にて税額控除を受けることが出来ます。

また、公益法人への寄付に関する詳しい説明のあるページを紹介します。

マイナポータル：https://www.koeki-info.go.jp/pictis_portal/other/zeisei.html

公共法人 information：<https://www.nta.go.jp/taxes/tetsuzuki/mynumberinfo/mynapo.htm>

賛助会費・寄付金へのお問い合わせはこちら 電話番号 03-5703-0251



公益法人税制について

令和7年6月20日以降(NF258にて紹介後)に御寄付頂いたのは次の方々です。(令和7年11月129日現在)

北海道/鈴木 順一 高瀬 良樹 田中 滋久 柿林 孝志 棚 栄正 瀬口 俊行 青森県/吉田 秀美 三浦 勝 岩手県/横石 善則 伊藤 善光 小倉 真理子 宮城県/川村 雄治 秋田県/船越 薫 山形県/渋谷 政信 近藤 将来 福島県/武田 好正 茨城県/田口 十三弥 大嶋 聰史 栃木県/伊藤 直樹 群馬県/大山 岳志 埼玉県/石井 豊史 佐藤 猛 加藤 憲治 千葉県/岩澤 正直 東京都/前原 四郎 神奈川県/相澤 文治 渡邊 幸雄 石渡 康郎 福田 努 新潟県/長橋 良穂 高橋 明 石川県/南出 清司 長野県/小松 秀幸 雪田 佳希 岐阜県/後藤 清一 静岡県/鈴木 好之 野澤 義雄 愛知県/久野 興吉 安野 博健 横山 賢一 三重県/木田 久主一 浅井 雄一郎 近藤 博資 滋賀県/北村 進一 京都府/小嶋 直樹 近藤 康人 中野 宏 大阪府/鷲本 庄司 兵庫県/汐谷 保 佐藤 吉昭 兵庫県国際農業者交流協会 奈良県/松井 譲樹 岡山県/春名 義則 広島県/山田 聖三 栗田 賢 徳島県/楠 正人 香川県/国方 弘 愛媛県/工藤 清志 高知県/渡辺 则夫 福岡県/久保田 真透 幸田 剛 佐賀県/稻富 篤 長崎県/里崎 徳一郎 熊本県/一瀬 俊郎 中山 昭則 後藤 哲英 宮崎県/大平 落 泰憲 鹿児島県/香西 直子 牧之瀬 正廣 沖縄県/仲本 英宏 名嘉 重則 (順不同、敬称略)

また同じく、今回新たに賛助会員へ入会された方々です。

北海道/糸屋 新一郎 渡邊 邦衡 青森県/山端 康一郎 岩手県/佐々木 嘉春 紺野 啓 宮城県/今野 建司 半澤 善幸 松崎 安典 福島県/大内 俊昌 茨城県/大貫 善之 栃木県/森島 規仁 群馬県/根岸 宏行 山崎 聰 埼玉県/石井 豊史 田上 智章 羽鳥 雄一 細田 保浩 千葉県/磯貝 正一 (有)北川鶴園 神奈川県/伊藤 直文 吉田 勝一 早藤 義則 新潟県/首藤 正人 鈴木 裕昭 島田 福徳 福井県/山田 豊 建石 正治 山梨県/ (有) M.A.C. Orchard 中込農産(株) 長野県/高見澤 宣男 横森 利明 菊池 辰夫 菊池 隆明 菊池 隆仁 雪田 米男 嶋崎 兵治 風間 久治 新海 昇 井澤 亮 青野 勝 高見澤 良夫 井出 博彦 今井 瑞穂 道木 太郎 新海 善光 浅見 満 雪田 岳志 信州くだもの村富永農園(株) 中道農園(株) 岐阜県/後藤 清一 静岡県/兼子 保峰 平野 耕志 渡辺 守男 愛知県/内藤 完次 横山 請悟 宮下 優子 原 宜延 綱島 慶人 三重県/佐野 拓也 京都府/小嶋 直樹 和歌山県/富岡 幸男 橋詰 龍也 岡山県/石原 直樹 廣瀬 樹里 広島県/光永 浩章 澪奥 拓二郎 愛媛県/工藤 清志 田村 隆悟 森崎 正 福岡県/久保田 康平 熊本県/河瀬 憲雄 中川 利美 工藤 美智成 宮崎県/園田 武文 河野 雄一郎 沖縄県/外間 勝太 喜友名 朝秀 林 昌平 与那嶺 修 石川 清友 (順不同、敬称略)

AIG損害保険株式会社



CCA東京支店

担当 室田・石川・杉村

〒105-8602 東京都港区虎ノ門4-3-20 神谷町MTビル 6F
TEL: 03-5637-0721 FAX: 03-3622-2040

職員の入社 よろしくお願ひいたします

令和8年1月13日 石原 真(業務部受入業務課職員)

編 集 後 記

明けましておめでとうございます。
今年もよろしくお願ひします。ぜひ
素晴らしい一年にしたいですね。



BBCC研修事業60周年記念 アメリカ再訪の旅



拝啓 新年を迎え、皆さまにはますます健勝のこととお慶び申し上げます。平素より国際農業交流協会の活動にご理解とご協力を賜り、心より御礼申し上げます。かねてより皆さまから、「もう一度アメリカを訪ねたい」、「当時お世話になった人たちに会いたい」、「かつての研修地を見たい」との声が寄せられております。コロナ禍もありなかなか前に進められませんでしたが、2026年はビッグ・バンド・コミュニティ・カレッジ（BBCC）を通じた農業研修事業が60周年を迎える節目の年でもあり、これを機に、『BBCC 研修事業 60周年記念 アメリカ再訪の旅』として、あの研修地アメリカをもう一度訪ねるツアーの企画を検討しています。BBCCを通じた研修制度以外で研修をされた方々にもぜひ

ご一考いただきたいと思います。

つきましては、企画の具体化にあたり、実施の時期、訪問先等について皆さまのご意向を伺いたく、裏面アンケートにご回答をお願いいたします。参加・不参加のご意向にかかわらずご回答くださいと助かります。なお、旅行費用は内容・人数に応じて変動いたします。詳細は、今後の調整の中でお知らせいたします。「もう一度、あのアメリカへ」。皆さまと再び現地を訪ね、思い出を分かち合う良い機会になればと願っています。多くの方々からのご回答をお待ちしております。

アンケートは、FAX (03-5703-0255)、Eメール (agtre@jaec.org)、郵送（協会の住所）にてご返送ください。

基本日程(案) ※実施は2026年～2027年

日 程	内 容
1日目	東京 Seattle Moses Lake (BBCC)
2日目	BBCC 訪問 Moses Lake 市内 元 Instructor や大学関係者とのレセプション
3日目	Moses Lake Grand Coulee Dam Columbia 川沿い に移動 Leavenworth Seattle
4日目	Seattle Los Angeles
5日目	Los Angeles 市内観光、MLB Dodgers 戦観戦
6～7日目	各自のオプション旅行(配属農場訪問や個人旅行) グループ行動希望者はLas Vegasへ:同行あり
8日目	Los Angeles 再集合
9日目	Los Angeles 東京 (解散)

BBCC研修事業60周年記念 アメリカ再訪の旅

BBCC派遣プログラムアンケート

お名前

派遣先国

1. 参加のご意向(いずれかに○)

- ぜひ参加したい
- 内容によっては参加を検討したい
- 今回は難しいが興味はある

2. 参加希望時期(複数回答可)

- 4月～6月
- 7月～9月(※7～8月はBBCCに研修生滞在中)
- 10月～11月

※冬季は天候により飛行機便等の交通機関が大幅に乱れることが多いため除いています。

3. 訪問希望地・内容等に関するご希望

(例:当時の配属農場を訪ねたい、BBCCでの交流を希望など)

4. その他ご意見・ご要望

ご回答締切:令和8年2月28日まで

★アンケート送付先★

公益社団法人 国際農業者交流協会 担当 皆戸(かいと)

FAX(03-5703-0255)、Eメール(agtrea@jaec.org)

郵送(〒144-0051 東京都大田区西蒲田5-27-14日研 アラインビル8階)

国際農友会 会報誌

Vol.33 contents

ご挨拶	1
各ブロックからの報告	
東北・関東	2
東海・中四国	3
九州	4
天地人	4
仲間たちの商品紹介	5
会員のひろば	6



今年は午年! アメリカ
松岡研修生はカウボーイ!



国際農友会 副会長 高見澤 宣男（長野県／S59／米2）

さて、先の総会では、同日に国際競争力ある農業人材の育成に向けた議員連盟（自民党）第1回総会が開催されました。これまで、海外農業研修や国際的な視点での農業人材育成への提言ができる稀有な機会として議員との貴重な意見交換の場となっていますが、この時、農林水産省担当部局からは、今後施行される見込みとのことで、食料システム法案の説明がなされました。これは、食料システム全体（生産から消費まで）で持続可能な価格形成を促す制度基盤をつくることを目的としており、昨今私たち農家が危惧し最も関心を寄せる生産者価格の安定と所得の保証につながる第一歩と受け止めました。

私の作る白菜は店頭で四分の一にカットされ、150円で売られるので、一個の値段は600円ということになります。出荷する時は一箱6個入りで、

澤宣男と申します。家業は長野県の高原野菜一大産地で野菜の生産をしています。本会の活性化と農業研修生海外派遣事業の発展に向けて一層の努力をしてまいる所存です。

会にて副会長を拝命しておられます、高見澤宣男と申します。家業は長野県の高

農産物価格と担い手育成

皆様、あけましておめでとうございます。

さて、昨年は終始米の価格が波紋を呼んでいましたが、農家にしてみれば、長い潜水の後、やっと水面に顔を出したということに過ぎません。いわゆる農協の引き渡し金（一時払い金）は、昨季の1.7倍ともいわれますが、それでやっと米農家を続けて行けるという気持ちにもなれる金額です。ですから、

議連総会の場で食料システム法案が説明されたことで、農産物価格の正当性を重視する流れを感じることができたのでした。

しかして、海外農業研修の魅力を伝えるうえで、その先にある就農の魅力が絶対必要です。仕事の魅力は、幸せに仕事を続けられることだと思います。儲からない、食つていけない業界を、だれが自分の子供、跡継ぎに好んで勧めるでしょうか？ 昨今の農産物価格は心底がつかりさせるものがあり、これを改善できる何かが無ければ、農業の未来に魅力はなく、結局は農業の担い手は育たないのではないかと危惧する次第です。

国際農友会のできることは何かー？ まず、私たちが健全な農業経済を守り、元気に農業を未来に繋ぐこと、それも一つ大切な役割だと思っています。

宮城県国際農友会の活動は以前に比べてかなり少なくなっています。それでも宮城県（農政部）の支援（事務局）を受けて、地方研修会やアセアン研修生受け入れ事業などが継続できており、現在の農友会活動の中心ともなっています。

令和6年度はフィリピンからの研修生3人が4月に来県し、それぞれ

した。近くの農産物直売所にもたちより、研修生の質問に同行の当会員が答える場面もありました。

その後、宿泊施設で研修生と会員が協力しながら夕食作りを行い、視察先から頂いたシャインマスカットを食べたり、会員のハーモニカ演奏もあつたりの交流が行われました。

次の日には今までとは違った形の交流がありました。というのは、農



視察先（ぶどうハウス） 左3人が研修生

け入れたり、農業に関係した職業やそれ以外でも活躍していると思います。会の運営はこれからもつと難しくなると思いますが、もしかしたら新しい活動が始まり、より多くの会員やそれ以外の人が参加しての行事が行われるようになつて行くかもしれません。それまで、会が存続できるように動いていけたらと思います。

業高校から「国際交流活動を実施したい」と要望があつて開催されたもので、高校生と研修生が「そば打ち」で交流するというものでした。その高校では韓国との交流を行つており、事前に「県内の海外農業研修生との交流が出来ないか」との話が県（農業振興課）にあつて、実施方法について検討を行つていたもの

関東甲信静越ブロック

前を向いていこう

つたりの目先の金を追つてやつてきたことなので、すが、思い描いていたものは、スイスで見てきた有畜複合経営の農場であり、ドイツ人研修生の花屋を経営していた農場であつたり、デンマークの研修生の配属農場で見た放牧酪農の農場などが私の頭の中でぐちゃぐちゃになつて、今の私たちの農場になつているのかもしれません。そ



農場スタッフ

しを思い返すと、自分も命尽きるまで前を向いて生きてゆきたいと思うことがあります。人生100年といわれて久しいですが100年は無理でもあと20年位は前向きに生きてみたいですね。

ういった目線を持たることは自分にとつて海外研修も少しは役に立つのかなど思います。

数年前にアセアン研修生の方々が農場視察で私たちの農場に来てくれたことがありました。私も若いころはいろんな方にお世話になつたので、見学の依頼はなるべく対応するようにしているのですが、アセアン研修



左から西村会長、米田副会長、杉本顧問

国际農友会OB・OGのみなさまには、それぞれの地域でご活躍のことは思っています。

さて、令和7年1月29日に岐阜県高山市にて開催されたプロツク営農研究会において、次の開催は富山県です！ということで、研究会の開催に向けて準備を進めてきました。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

富山県内では協会の事業に参加されたOB・OGの方は、昭和20年代から現在にいたるまで、70年あまりの間に100名近い方が海外で研修してこられましたが、現在登録会員は34名中、総会の出席者は4～5名程度というのが現状です。

そのような状況の中でも、近年では諸先輩方や関係者の方々の努力で西日本プロツク研究会（H12）や東海・近畿・北陸プロツク研究会（H24年）と開催されました。実際に3年ぶりの開催になります。

今回の研究会概要ですが、令和8年2月4日（水）～5日（木）の日程で、大雪などが心配ですが、天候

いております富山県・JAとやま中央会・JA全農とやまさんからもそれぞれご出席いただきまして、情報交換会にも出席の予定です。その他の内容についても、高校生・畜産アンバサダーによる海外研修の活動報告、富山県海外農業研修生OBから、上坂恭平氏（R3アメリカ）・金田考示氏（H20アメリカ）による帰国者報告、海外赴任活動報告などを聞いていただきます。

2日目の現地研修会では、入善町のよねだ農園・米田勇太・明子夫妻（H10オランダ）にてチューリップ切り花の取り組みについて研修する予定になつております。

研究会の開催にむけて、この1年準備をしてまいりました。当日は、OB・OGはじめ関係者の皆様とお会い出来ることを楽しみにしています。

—「令和のコメ騒動」の教訓を踏まえて—ということで、このタイミングで貴重なお話をいただけることは、感謝しております。参加者にとっては、学びが深まり刺激になると思っております。

西川教授の国際的なフィールドワークを用いて、「日本の米産業（農業）再建の道筋」についてお話を拝聴できることと存っています。

は祈るばかりです。

統一テーマは、「持続可能な農業・農村」ということで、これから日本農政や農業を考える機会にしたいと思い、基調講演には茨城大学学術研究院応用生物学野の西川邦夫教授に依頼しましたところ、快く引き受けましたと講演のテーマは、「食糧・農業・農村基本法の改正と食糧安全保障」サブタイトルが

関東甲信静越ブロック

帰国後の活動を振り返って

には個別に研修プログラムの説明質疑応答など研修に向けてのサポートをすることができました。希望する学生と先生を交えて座談会形式で話をした際には、チャレンジしたいと思う反面、言語の壁が心配という声が多くあがりましたが、うまく心配を取り除ける回答ができなかつたこともあり今後O.B・O.G会員にも相談したいところです。

一昨年には島根から2名の研修生がアメリカコースに参加し、うち1名の短期の渡航前実習受け入れを行いました。初めての研修生の受け入れで至らないところはありましたが研修生がいることで職場の雰囲気に

アメリカコースの研修が修了して帰国後5年間の活動を振り返りたいと思います。私が研修していた2019～2020年はちょうど新型コロナウイルスが発生した年であり、プログラムの変更、帰国後の対応など混乱している時期でした。帰国後は実家の肉牛牧場に就農し、しまね和牛の生産に従事しています。当時は新型コロナウイルスが蔓延しておりすぐにOB・OG会での活動はできない状況でしたが、徐々に活動が再開し母校である島根県立農林大学校でOB・OG会メンバーと共に数回研修事例発表をさせていただきました。なるべく興味を持つつてもらうべく写真を多用しながら、現地での農場家族との関わりや日本と異なるアメリカ特有の仕事内容などを中心に話し、訪問後のアンケートでは毎回数名の学生に興味を持つてもらうことができました。興味をもつてもらえた学生

来年度は農林大学校から1名アメリカコースへの参加が決定しました。母校からの参加者は私が参加して以降7年ぶりであり、ぜひ実りある研修を経験し無事に帰国した後、後輩に魅力を存分に語っていただきたいと思います。私自身も今後農林大学校などと連携を強め、研修の魅力を発信できるよう努めてまいります。



農林大学校での事例発表の様子

当会は、2017年に組織を再結成してから今年で8年目を迎えました。結成当初の総会参加者は40名、翌年の「九州ブロック国際化対応農研究会」では県内OB・OGの約60名が参加し、幸先良いスタートを切りました。

しかし、その後、コロナ禍における活動休止による会員意識の低下や経年による会員の高齢化、病気や死亡等による離脱など、将来的に組織の維持が憂慮される状況になりつつあります。

その要因としては、外農業研修生の派遣者数の減少や、OB・OGを会員に取り込めていない状況などがあります。当県では組織の強化が急を要する課題であります。会員自身が仕事に忙しく、時間的余裕もない状況の中、如何に無理なく、組織活動を継続していくか、会員が振り向いてくれる活動及び組織運営のあり方が問われているようになります。

さて、当会の主な活動としましては、総会の開催、啓発キャラバンとアセアン農業研修生受入事業です。一番に重きを置くのが総会です。如何に参加者を増やし会費微収し予算確保を図るか、役員みんなでOB・OG会員に呼びかけて参加を促します。



令和7年度総会の開催



アセアン農業研修生の那覇空港での出迎え

そして、2026年度は、沖縄県において「農研究会」を開催予定です。首里城が復元されるタイムリーな時期に九州各県のOB・OGをお迎えして開催できることを嬉しく思います。皆様を万全の体制でお迎えしたいと考えております。

啓発キャラバンは、県立農業大学と琉球大学農学部の学生への説明会を開催します。加えて、農業大学校の学園祭を活用し、学生及び一般向けの展示ブースを設置しての啓発キャラバンを行っています。農業大学卒業生のOB・OGが多いことから会員交流の拠点にもなります。アセアン農業研修生受入事業は、2019年から取り組んでおり、沖縄本島北部地域の会員OBが受入農場主となっています。本県では、タヒチとインドネシア国から研修生を受け入れてあります。

天地人

てんちじん

千年もの時

国際農友会

東海・近畿・北陸三県ブロック理事
岩田 雅昭 (三重県 / S54 / 米2)

千年もの時、人々を育んだムラを思う

「千年村」という言葉をご存じでしょうか。長い日本の歴史の中で、自然災害や戦乱から復興・定住を繰り返して今も存在する地域には「暮らしやすさという価値がある」として、早稲田大学の研究室を中心に、古文書から地名を拾い、現存する約2千か所を特定、その調査研究・認証をするプロジェクトだと、啓発キャラバンでお世話になっている三重大学・閑谷先生から伺いました。

私が地域の小学校PTA役員の頃、校区内にはスーパーもコンビニもな

い、鉄道バスは通っていない、企業はない、信号機は4基だけ、農振地域だけど農地の区画は明治のまま。国道は通っているが、生活道路で車の対向が出来るところは限られる、という状況でした。こんな田舎で「子ども達に地域の何を伝えたらよいのか?」という思いから(補足すると校区の外にはスーパー・コンビニが多数存在)、地域の歴史を掘り返したら、あるわあるわ、文献には伊勢参宮の為政者を饗應した宿場、神宮奉納の御厨、古くは646年創建の神社や、道真公を没後最も早く祀ったかもしれない天神さんの伝承等々。

奈良・京都に近い東海近畿北陸にはそういう由緒ある田舎が多すぎて、目に見える現物が残ってなければ注目もされませんが、権力者によ



高温干ばつで今年も笑えない



平地にある一等三角点 海抜4.5m

る移住ではなく、暮らしやすさから自然発生的にその地で千年以上人々が生活を営んできた事実があります。しかし、その多くが今、消滅あるいはソーラーパネルに沈もうとしています。

近年、やっと農政もアメリカ型効率重視の農業を想定するようにはなりましたが、急峻な地形や昔ながらの集落、神社仏閣・遺跡の散在する日本の農村に持ち込む矛盾をどう解決するのか、しかも永く農地や食料生産を担ってきたのはそんな地域の歴史そのものなのです。日本のコメ高騰とカリフォルニア国府田農場撤退の話題の中、「千年続いたムラ」の行く末を思わずにはいられないこの頃です。

仲間たちの商品紹介

たおファーム

代表 櫻井 はつき
(山梨県/H26/スイス)



みなさまこんにちは。櫻井
はつきです。

2015年にスイスへ渡航し、
養豚場で研修してきました。
現地で学んだ「よく観察し、
自然のリズムに沿って動物を
飼う大切さ」が今のが農業経営
の基盤となっています。

帰国後は放牧養豚や平飼い
養鶏、有機野菜農家を経て、
2020年から山梨県北杜市で仲
間と共に『たおファーム』を
立ち上げました。現在は平飼い
養鶏家として、鶏の健康と
お客様の食卓をつなぐ卵づくり
に励んでいます。

当園のモットーは【食べて
生きてる】。地域の副産物を活
かした発酵ブレンド餌を与え、
鶏のお腹の中から元気を育ん
でいます。

自然な環境でストレスフリ

ここでは、海外農業研修の仲間たちの商品紹介をします。
オンラインでの購入が可能です。

ーを目指す飼
養法により、
鶏たちはのび
のびと過ごし
ています。

その結果産
まれる卵は、
白身の弾力が
強く、黄身は
あっさりして
いながらコク
が深く、甘味
と旨味のバラ
ンスが絶妙で
す。一口食べると「もう1個！」
となる、素朴だけどやみつき
になる味わいです。

こうした取り組みは山梨県
のアニマルウェルフェア認証
で最高ランク三つ星を獲得。
多くの料理家やパティシエの
方々にも高く評価され、プロ



右が櫻井 OG

の現場でも愛用されています。

小さなお子さんにも安心し
て食べさせられる、栄養たっ
ぱりでおいしい卵です。この
寒い季節に産まれる期間限定
の【寒卵】黄身が濃く、味わ
い深く、ご利益があると言わ
れ縁起物として贈答用、ご自
身へのご褒美にぴったりです。

MEISHO FARM の生島明で
す。令和2年度アメリカコース
でカリフォルニアにある Hikari
Farms(旧 Nagamine nursery)
にて研修を行い、今は佐賀県の
吉野ヶ里町にて、一念奮起して
MEISHO FARM を1人スタートしました。軽トラ1台と2畝
ほどの畑を鍼で耕すことから
始まりましたが、アメリカ研
修の仲間が設立当初から駆け
つけては夢をかなえる手助け



創意工夫で毎日野菜と向き合って
仕事をしています！

をしてくれました。また、多くの研修OBの方々から応援をして
いただき今は畑が8反、田ん
ぼが2.3町の合計3.1町ほどで、
多品目の野菜を生産し独自販売
を行っています。志を同じくして
くれている仲間にも恵まれ、
MEISHO 独自の物流を確立、6
次化商品である「豆板醤」もで
きました。

今年の課題として掲げていた、
生産量の増加、それに伴うア
ルバイトの方の確保は順調に進
み、来年には初年度に手伝って
くれた仲間がMEISHO FARM に
本気で加わってくれることにも
なりました。

今回 New Farmers にてこれ
まで応援してくださった皆様へ



大人気で完売した
MEISHO FARM の
豆板醤です！

MEISHO FARM

代表 生島 明(佐賀県/R2/アメリカ)



オンラインショップ

<https://meishofarm.stores.jp/>

ホームページ

<https://meishofarm.com/>



野菜セット：こちらもオンラインで購入
いただけます。※時期によって野菜セット
の内容は異なります。

の感謝気持ちを改めてお伝えさ
せて頂きます。

そして、MEISHO FARM の豆
板醤をご紹介いたします。

この豆板醤は僕たちが栽培した
ソラマメとトウガラシをペ
ースに吉野ヶ里にある老舗醤
油味噌メーカーさんによって発
酵・製造を行った「吉野ヶ里の

魅力が詰まった」商品です。辛
味のなかにソラマメの旨味が凝
縮していて、焼肉やステーキと
とてもよく合います。農場のホ
ームページ・自社ECサイトより
購入可能です。ぜひこの機会に
ご購入いただけますと幸いで
す。

「土からの学び」

幼児から研修生まで、その「やろう！」とする気持ちを育み伸ばします!!

森永 大直 (大分県 / S63 / 米 2)

- 森永農園 園主:梨の生産、販売、作業受託
- JAEC:US西日本講習所長
- 国際農友会 理事
- 大分県国際農友会 事務局長
- 学研教室指導者:庄内元気な教室 / ゆふいん元気な教室
- 雲取神楽社 副代表
- 由布市消防団 庄内方面隊 第5分団長



★商品紹介の希望者募集します★

海外農業研修OB・OGの皆さんで、ぜひ全国の仲間にご紹介
したい、買ってほしいとお考えの方はいませんか？国際農友会
では、仲間の素敵な生産物を色々な形で応援したいと考えて
います。自薦他薦は問いませんので、ぜひご一報ください。次号
は8月号になりますので、お中元やお歳暮に良い品を紹介く
ださい！！もちろん、食べ物とは限らずなんでも取り上げます。
ご連絡お待ちしています！

【連絡先】

国際農友会事務局（国際農業者交流協会内）担当 皆戸
電話03-5703-0253 Email: kaito@jaec.org

会員のひろば 会員の動向 (敬称略、順不同)

同期会

昭和62年米国2年制 23回生同期会

【開催日】2024年12月7日
【開催地】横浜中華街



派米農業研修生 16回生同期会

【開催日】2024年10月26日
【開催地】愛知県



叙勲・受賞

令和7年	第3回IFFA 日本食肉加工品コンテスト2025 金賞 藤田 春恵(岩手県/H14/米1)
令和7年	第64回農林水産祭 内閣総理大臣賞 飯野 公一(山梨県/S54/米2) 飯田 翼・めぐみ(山梨県/H29/アメリカ)
令和7年	第64回農林水産祭 天皇杯受賞 佐藤 勲(群馬県/S59/米2)
令和7年	11月旭日大綬章 蒲島 郁夫(東京都/S42/米2)
令和7年	11月旭日単光章 田中丸 土男(佐賀県/S48/米2)
令和7年	11月旭日小綬章 湯之原 一郎(鹿児島県/S52/米2)
令和7年	11月旭日小綬章 長屋 栄一(北海道/S47/カナダ)
令和7年	11月大日本農会緑白綬有功章 西垣 俊秀(和歌山県/S54/米2)

ご逝去

令和元年12月 中倉 康憲 (北海道/S38/米3)
令和2年11月 通伝 修市 (石川県/S40/米1)
令和3年3月 株戸 實 (三重県/S37/米3)
令和5年11月 田中 秀穂 (和歌山県/S35/米3)
令和5年11月 保坂 博 (神奈川県/S31/米3)
令和6年8月 山内 豊 (愛媛県/S35/米3)
令和6年10月 鹿野 寛和 (千葉県/S32/米3)
令和6年10月 林田 浩 (長崎県/S34/米3)
令和6年10月 松元 正治 (鹿児島県/S38/米3)
令和6年12月 松浦 孝 (島根県/S32/米3)
令和6年12月 小野 功 (東京都/S35/米1)
令和6年 中西 弘 (石川県/S32/米3)
令和6年 橋本 (小野寺) 克紀 (岩手県/S48/米2)
令和7年1月 佐々木三郎 (宮城県/S49/オランダ)
令和7年1月 浜 宏和 (和歌山県/S35/米3)
令和7年1月 高瀬 良樹 (北海道/S39/米1)

令和7年2月 山下 修 (山口県/S32/米3)
令和7年3月 設楽 齊 (静岡県/S31/米1)
令和7年3月 加治屋 一徳 (鹿児島県/S38/米3)
令和7年3月 竹下 満 (島根県/S47/米2)
令和7年4月 加藤 禮太郎 (鳥取県/S31/米1)
令和7年4月 牛山 壽廣 (長野県/S38/米3)
令和7年4月 古庄 範光 (熊本県/S49/米2)
令和7年5月 井場 昭 (熊本県/S44/米2)
令和7年5月 見並 正之 (三重県/S31/米3)
令和7年6月 安藤 貞雄 (宮崎県/S35/米3)
令和7年7月 中島 英一 (神奈川県/S32/米3)
令和7年7月 西堀 政利 (三重県/S40/米15)
令和7年7月 飯森 一志 (鹿児島県/S42/米2)
令和7年7月 葛原 定一 (岡山県/S43/米4)
令和7年8月 浜田 房雄 (愛知県/S36/米1)
令和7年8月 久保田 武男 (静岡県/S37/デンマーク)

令和7年8月 伊藤 一男 (東京都/S32/米3)
令和7年10月 町田 猛 (鹿児島県/S42/米2)
不明 岩下 信雪 (長崎県/S33/米3)
大塚 昇 (長崎県/S33/米3)
田村 一郎 (千葉県/S34/米3)
川上 常衛 (岡山県/S34/米3)
佐藤 房雄 (カナダ/S38/米3)
宇都宮 義朗 (愛媛県/S44/米19)
園田 富雄 (熊本県/S53/米2)
前田 勝夫 (鹿児島県/S33/米3)
福満 一孝 (鹿児島県/S35/米1)
浪越 良博 (香川県/S37/米3)
出来 二彦 (鹿児島県/S34/米3)
鈴木 清治 (愛知県/S46/米2)
安岡 錢一 (高知県/S39/米3)

編集後記

2025年の流行語大賞は何だろうと考えた時、「古古古米」や「クマ被害」はすぐに頭に浮かんだ。農村や農業と関わる言葉だが、人もクマも食べ物に翻弄された1年だった。物価高も続くし、食うに困らない時代は少しずつ遠い話になりつつある。



全国農業新聞



週刊 月4回 金曜日発行
月額700円、年額8,400円

■お申し込みはお住まいの市町村農業委員会へご連絡ください

[発行所] 一般社団法人全国農業会議所

〒102-0084 東京都千代田区二番町9-8中労基協ビル
電話: 03-6910-1130 (平日9:00~17:00、土・日・祝日は休み)
ホームページ: <https://www.nca.or.jp/shinbun/>

パソコン・タブレット・スマホでいつでもどこでも新聞が読める

電子版を配信中!!

月4回・毎週金曜日・午前0時配信 購読料 月額500円・年額6,000円

全国農業新聞

検索



クレジットカード払いのみでのお支払いとなります

